



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	「機智人物故事」ノート：そのトリックスター性について
Author(s)	鈴木, 健之
Citation	東京学芸大学紀要. 第2部門, 人文科学, 34: 243-254
Issue Date	1983-02
URL	http://hdl.handle.net/2309/13152
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

「機智人物故事」ノート

— そのトリックスター性について —

鈴木健之

(漢文学)

中国民間文学のジャンルにおいて、「機智人物故事」という用語が最近よく目につくようになった。民間文学関係の諸雑誌に「機智人物故事」と銘打って、各地、各民族の故事が紹介されているし、単行書として専集も出版されるようになった。所謂「機智人物故事」とは何か。それは特定の人物にまつわる頓智話、おどけ話、狡智譚、笑話の謂で、わが国でいえば、一休話、肥後の彦市話、豊後の吉吾話、吉四六話などに相当する。本稿では、まず機智人物と称される人名の一応のリストを挙げ、現代中国の学者研究者の、この故事についての定義、見解を紹介し、それに対して、異なった視点に立っていささか管見を述べてみたい。

機智人物表

現在までのところ筆者が手元の資料をもとに読み、知り得た限りでの初歩的リストであり、もとより網羅したものではない。人物名、伝承地、民族名及びコメントを付した。首字の拼音のABC順に排列し

た。() 内は異表記、別称。

阿凡提 (阿潘提、阿方提)

族、塔吉克族、柯爾克孜族

維吾爾族、烏孜別克族、哈薩克

中国で最も有名で人気のある機智人物。機智人物のことを「阿凡提式的人物」と呼ぶほどの代表格。人形劇や映画、喜歌劇が作られている。流布する地域はきわめて広く、中国新疆のほか、西アジア、中央アジア、小アジア、アラビア、東欧、地中海沿岸にまで渡り、四十種に及ぶ言語によって語られているという。オスマン・トルコ時代、十七世紀末に一フランス人によって紹介されて以来、ヨーロッパにおいても、フランス、イギリス、ドイツ、ロシア、イタリア語など各国語に翻訳されており、いわば「世界的形象」。中国で知られている彼の故事の数だけでも、恐らく四、五百以上あろう。

彼の本名は「納斯列丁」、「納斯爾丁」ナスレツテイン、「宗教の勝利」、「宗教に対する支持」という意味。「霍加(和加)・納斯列丁」ホジャ・ナスレツテイン、「納斯列丁・阿凡提」ナスレツテイン・エペンディ、「毛拉・納斯列丁」モラ・ナスレツテインと尊

敬して呼ぶが、ホジャとかエペンデイと簡称される。ホジャ、エペンデイ、モルラはいずれも称号で、ホジャはベルシャ語起源から、アラビア語、トルコ語に入って「先生」「老師」にあたり、エペンデイもトルコ語の知識人に対する尊称エツフェンデイのウイグル訛り、モルラは回教僧職に対する称号である。ナスレッティン・ホジャなる人物については、实在説と非实在説とがあつて、大体トルコの学界では实在を認めている。实在説にも諸説あるが、十四世紀後半から十五世紀初頭の人というのと、十三世紀の人という二つのグループに分けられるが、後者がほぼ確実視されているらしい。これに対して、特にヨーロッパの学界では实在説に異を唱える者が多く、ナスレッティン・ホジャ物語の原型は十世紀末にアラブ族に流した、イラクのクレーファ生まれのジュハ(ジョハ)という人物の滑稽譚、頓智話にある、とする学説がある。要するに、アラブ・イスラム世界にその起源が求められるというのである。詳細については、トルコ語の版本七種をもとにした、護雅夫訳『ナスレッティン・ホジャ物語』(平凡社、東洋文庫、一九六五)「つけたり」参照。

阿方 貴州松桃 苗族 「反江山」と同一人物。

阿古頓巴(阿格登巴、阿叩登巴、阿古登巴) 藏族

西蔵はもとより、甘肅、青海、四川、雲南と非常に広く分布し、話数も多い。实在の人物という説もあり、彼にまつわる「遺跡」や記念物が各地にあるという。「阿古」は藏語で長上に対する呼称、「おじさん」の意。「登巴叔叔」とも呼ばれる。「登巴」は「智者」「導師」の意。「滑稽」の意ともいう。簡称、愛称して「阿頓」「阿登」。四川阿壩藏族自治州一帯の藏語で「登巴俄勇」と呼ぶが、「俄勇」も「おじさん」(舅舅)の意。

阿甲 布依族
阿俊 布依族

阿勒 水族

阿勒的爾・庫沙 哈薩克族 「阿凡提」と同一人物。

阿力布 黑龍江齊齊哈爾市郊外 達斡爾族

阿暖(阿朗) 雲南德宏、耿馬地区など 傣族

誕生について、いくつか異伝があり、子供のいない老夫婦に天神が授けたとか、母親が牛の飲み残しの水を、あるいは猿が食べ残したトウモロコシや瓢箪の中の水を飲んで生んだという。神話的要素の濃い英雄人物でもある。

阿推(阿嘎布拉) 基諾族

阿一旦 納西族

清代、咸豐、同治年間(一八五一―一八七四)に雲南麗江県黄山村の貧農の家に生まれ、幼時に三年間私塾に通ったが、木家の佃農であつた親が地租を滞納し、そのかたに木家の「長工」(常雇いの作男)にさせられた。後に迫害を受けて大理に出奔し、役者となり、二十余年間転々と流浪した末、故郷に帰り晩年を送つたという。敵手の木老爺の先祖は忽必烈の時代、麗江納西族の酋長麦良で、明の洪武年間(一三六八―一三九八)に朝廷より木姓を与えられた豪族。

阿朱尼 哈尼族

艾薩木・庫爾班 維吾爾族

艾蘇、艾西 傣族

寡婦が天上の玉皇大帝に祈願して生まれた艾蘇、艾西、艾辟節の三兄弟はともに聡明であつたが、艾西が抜きんでいて、彼らの話は百話以上伝えられており、古い「貝葉書」にも刻されている。

艾玉(阿玉) 雲南大理、洱源、劍川など 白族

明代鄧州(今の洱源县)の貧家の出。幼少から私塾で書を読み、「神童」と謳われ、明の穆宗の宰相となつた張居正とともに、大理の李元陽の門下生であつた。進士にまでなつたが、仕官を望まず、艾

自修（初めは艾自羞）の学名を艾玉に改めたという。彼の話は伝統的笑話、文人趣事の影響が強く、徐文長故事とやや類似する。

艾掌来 布朗族

巴拉根倉（巴拉根昌） 内蒙古昭烏達盟、錫林郭勒盟など 蒙古族

畢矮 浙江各地、浙江安徽交界一帶 漢族 浙江蘭溪縣の人。

波七卡 土家族

卜合 广西 瑶族

卜当 布依族

卜寬（卜賈） 侗族

錯爾木呷 四川涼山州 彝族

達太 雲南滄源縣 佤族

多略 布依族（？）

爾江 广西金秀 瑶族

爾面 土家族

反江山（誑張三） 湘西 苗族

敵役に登場する「守備老爺」（倉番のだんな）の「守備」とは、屯田から取り立てた年貢を倉庫に保管する職分の軍政官のこと。清朝嘉慶年間に、湘西の苗族反乱を鎮圧後、清朝政府は田地の大部分あるいは全部を没収し、そこに屯田を設け、屯田兵を養うために過酷な収奪搾取を行った。反江山に仮託された話はこの時代に生まれたのであろう。貴州松桃の苗族はこの主人公を「阿誑」と呼び、漢族は「誑張三」「誑匠三」とあだ名した。松桃のほうの翻訳整理者は苗族の呼称「阿誑」に従い、当地の漢語で「誑」と「方」が近い音なので「阿方」に書き改めた。一方湖南のほうは字面の悪い「誑」（ウソ、デタラメの意）を、湖南方言では「方」と区別がないので「反張三」に改めたい。さらに湖南首の近い「反江三」から「反江山」へと書き改められた。従って「阿方」と同一人物。

甫貫 广西三江 侗族 「卜寬」と同一人か。

干達来 傣族 名判官、調停役。

公頗 雲南馬山県 壮族

公天 壮族

龔岳山 湖南新化、懷化、溆浦一帶 漢族（？）

「十麻子」ともいう。「扯誑佬」とあだ名される。

光加桑（刮糾三、黄江三、黄江桑） 雲南怒江傈僳族自治州の瀘水、碧江、福貢、貢山四県、保山、徳宏 傣族

和加納斯爾（古嘉納斯爾） 哈薩克族 「阿凡提」と同一人。

黄丈三（王張三、誑張三、滑丈三） 白族 雲南西部、南部の各族にも伝わる。

甲金 貴州惠水、羅甸、貞豊、望謨、安龍一帶 布依族

「頭のきれる孤兒」「滑稽な孤兒」の意味。

簡文柱 苗族

金貴 水族

金善達 朝鮮族

老登 壮族

佬巧 壮族

李海進 広西環江県下南公社 毛難族

六八 白族

陸本松 侗族 清代、貴州黎平県肇興の人、秀才。

羅周林 山東臨清県 漢族

羅牧阿智 雲南禄勸県 彝族

毛拉則丁 新疆吐魯番一帶 維吾爾族

門帕 哈尼族優尼人

木且苦苦 藏族

轟局桑布（民基桑布） 西藏の山南、拉薩、青海 藏族

龐振坤 河南西部 漢族

南陽盆地に特に多く流伝。清朝乾隆年間、鄧州（今の河南鄧県）の貢生。

頗丕 雲南峨山県 彝族

賽来依・恰堪（賽蘭依・恰坎） 新疆喀什 維吾爾族

本名賽来依にニックネーム「恰堪」をつけた。恰堪は「敏捷」「犀利」の意味。実在の人、一八一六〜一九〇五。喀什地区疏附県の貧農の出。歌手、舞蹈家、熱瓦甫（撥弦楽器の一種）の名手。一生南疆、北疆各地を放浪した。

沙格德爾（莎克蒂爾） 蒙古族

一八六九〜一九二九、民間詩人。内蒙古昭烏達盟巴林右旗查汗木仁の貧しい牧民の生まれ。七歳にしてラマ僧にさせられ、後に追放されて托鉢僧として流浪した。諷刺詩でもって王公、上層ラマ僧を譏責した。

沙哥克如（沙戈克忍） 彝族

松谷克忍 四川凉山 彝族

宋丑子 山西定襄県 漢族

王喜 北京市郊外平谷県 漢族

徐文長 浙江紹興一帶 漢族

明代実在の文人。『明史』にその伝がある。一五二一〜一五九三。名は渭、字は文長。山陰（今の紹興）の小官僚の家に生まれ、二十歳で秀才となつた後、何度も郷試に應ずるが及第せず、三十七歳の時に、浙江総督胡宗憲の幕僚となり、浙江沿海、紹興一帶で倭寇討伐の前線に赴き、奇計を用いて功を挙げた。宗憲の下獄自殺から累禍を恐れて精神に異常をきたし、四十五歳の時には、自ら墓志銘を書き自殺を謀った。やがて後妻の張氏の不貞を疑い、誤って妻を殺し七年間の獄中生活。出獄後、六年間各地を漫遊し、帰郷してから

は藏書や自筆の書画を鬻ぎ晩年を送った。死後、公安派の創始者袁宏道によって彼の詩文が偶然に発見され、集に編まれて後世に残つた。一生涯志を得ず、また家庭的にも恵まれず、奇矯で気骨ある文人であつた。詩文書画に秀れ、奔放で独創的である。現在紹興では彼の故居「青藤書屋」が修復されているという。彼にまつわる逸話、伝説、笑話は解放前からよく知られ、文人らしく文字遊戯、言語遊戯の話も多い。

岩江片 雲南滄源県 佤族

楊馬角 苗族

么刀爸 雲南新平県 彝族

張沙則 雲南楚雄 彝族

仇片 景頗族

召瑪賀 傣族 大臣の息子。謎解きの話が比較的多い。

趙成 雲南鶴慶、麗東壩子など 白族

少数民族が圧倒的に多いことがわかる。中には、「機智人物」として疑問視される者があるかもしれないが、一応列挙しておいた。漢族の中には、河北の老江、湖北の張老十、王元白、湖南の王凡九などの似た人物がいるが、機智人物としてはキャラクターに相当遜色があり、「長工闘（与）地主」型故事に属するものも少なくないと考えられるので、表に含めないのが妥当であろう。解放前に採録された、例えば広東翁源県の塗雞養など類似の話があるが、解放後の資料に限った。

中国学界の見方

現在中国の民間文学研究者は「機智人物」とその話をどう見ているのか。どう評価しているのか。一、二、三の民間文学概説書から見よう。張紫農は『民間文学基本知識』の笑話のところでも次のようにいう。

「ここでさらに言及しなければならぬ点は、笑話と密接な関係をもつ各民族の機智故事である。例えば、蒙古族の『巴拉根倉の故事』、維吾爾族『阿凡提の故事』、藏族の『阿古登巴の故事』のほか、漢族の徐文長故事なども民間の非常に貴重な諷刺文学である。それらは各民族にあって、伝説化、理想化された一人物を中心とする故事群である。この種の故事はなかなか複雑である。その主人公、巴拉根倉、阿凡提、阿古登巴、徐文長はいずれも場面によって、語り手によって常に異なる思想性格、時に反対の思想性格すら持つ。しかし、彼の愛憎のはっきりした特色、彼の超人的智恵、彼の果敢に権勢者をからかい、嘲笑し、皮肉り、諷刺し、弱小者に同情する特色、これがその性格中の主要な面なのである。彼は人民の知恵の生きた表現である⁽¹⁾。」

段宝林『中国民間文学概要』第四節民間笑話ではやや詳しく次のようにいう。

「阿凡提故事は維吾爾族の誰もが知っている秀れた笑話である。数多くの阿凡提笑話は反動国王、大臣と狡猾な巴依（地主）、頭の鈍い判官ら圧迫者や搾取者を激しく諷刺する。そればかりか、阿凡提笑話はすでに遥かに諷刺を超えて、さらに巧みに反抗するユーモア人物を創造し、阿凡提は勇敢で機智に富み、愛憎がはっきりしており、権貴を恐れず、たとえ最も狡猾な敵でさえ、彼の面前で必ず恥ずべき失敗に遭い、彼の辛辣な嘲笑を受ける。」

「蒙古族巴拉根倉の故事は反抗性もつと強く、彼は『親王様を轎から降ろさせる』こともできるし、牛頭馬面をコテンコテンに打ちのめし、閻魔大王を打ち殺し、自分が閻魔大王となることもできるし、玉皇大帝ですら彼に対してはまるで打つ手がない。藏族の登巴叔叔（阿古登巴）は農奴主に狗のまねをさせ、糞を食わせ、人に殴らさせ、あげくに雅魯藏布江にはまって溺死させる。このほか、

苗族の反江山、彝族の羅牧阿智、布依族甲金、納西族阿一旦等々すべて阿凡提式の人物で、彼らは身分が低く、一介の奴隷、農奴、貧しいラマ僧、長工など最下層の労働人民であるが、彼らは勇敢に威厳ある大小統治者を蔑視し愚弄し、人民の天才と正義を表現する。彼らの機智、ユーモアは統治者の貪欲、愚鈍と鮮明な対照を成す⁽⁴⁾。」

「阿凡提、巴拉根倉のような笑話中の多くの機智人物、さらには長工の故事、巧女（賢い女）の故事中の正面主人公たちは、諷刺される対象の対立面であり、正面の喜劇人物であり、これらの人物から滑稽な愚鈍や滑稽な醜悪のほか、滑稽な機智と諷刺が見られるが、それは崇高の反面、美の反面でもなく、それとは全く逆である。人民の心の中にあつては、また故事の中にあつては、彼らは美しく、崇高で敬愛すべき人物なのである⁽⁵⁾。」

段宝林は、阿凡提式の喜劇人物を、嘲笑される反面人物の対立面、すなわち反面人物と闘争する正面人物と規定し、この類の笑話を「闘争笑話」と呼び、これら正面喜劇人物は、反面人物だけが喜劇人物であり、醜悪で愚鈍であると考える従来の古い喜劇の概念及び美学を突破し、この人物の喜劇性はむしろ美であり、崇高であると強調するのである⁽⁶⁾。

天鷹は各機智人物を分類し、その特徴と故事の内容を分析して最も詳細である。彼は「労働階級人物故事」の一群を建て、その中に機智人物故事を入れ、人物の身分とその闘争方式によって次のように分類する。図式してみると、

- (一) 長工 閻地主型 例、甫貴、公天、甲金、反江山
- (二) 嘲りと罵りでもつて封建貴族、僧侶、富豪、権貴と闘う人物故事

① 知恵に富み、口達者で、巧みにウツをつき地主や統治者をベテシにかけ、ひどい目にあわせる人物、例、巴拉根倉、阿古登巴、阿一旦、阿凡提。

② 統治者から「狂人」「瘋癲」と目され、自己の正直と鋭利なことはでもって統治者を嘲り罵る賢しいラマ僧、沙格徳爾。

天鷹は長工闘地主故事についても一節を割いて論じているが、この型の故事と労働階級人物故事、ないしは機智人物故事との区別、関係、相違については、必ずしも分明ではなく、機智人物故事の整理分類もどのような意味があるのか、いささか疑問が残る。

そして、天鷹は労働階級人物故事の一特徴として、こう概括する。

「故事は強い社会的意義を有し、封建社会の被搾取階級と統治者の深刻な矛盾を反映している。闘争は常に主人公のユーモア、風趣諧謔の性格で覆い隠されているが、この闘争方法は当時の社会環境によって決定されたものである。当時の歴史的条件のもとで、この闘争の方式は労働人民にとって重大な意義を持っていた。」⁽⁸⁾

祁連休は『少数民族機智人物故事選』の序言で解説を書いているが、これは現時点で最も典型的な見解である。

「わが国少数民族の機智人物故事は、内容が非常に豊富である。総じていえば、奴隸と奴隸主、農奴と領主、農民と地主との間の階級矛盾と闘争がこの類の故事に表現される基本的主題である。」⁽⁹⁾

「それらの社会的意義は主として次の点に表われている。この類の作品は大胆に公然と搾取制度の旧秩序に挑戦し、ある程度反動統治者と搾取者の氣勢に打撃を与え、広範な人民大衆の反抗意欲と闘争精神を激励し、それによって人民大衆を助けて歴史の前進を促した。」⁽¹⁰⁾

以上見てきたように、いずれの評者も共通して階級史観に立って、機智人物の階級上の属性を明らかにする。

支配階級(搾取階級)	領主	官僚	地主	教権など	反面人物
被支配階級(被搾取階級)	機智人物(小作、奴隸など)				正面人物

これが二極対立の基本的構図である。そして機智人物を「労働人民の闘争性、反抗精神の体現者」「各族人民の智慧の体現者」「各族人民の智慧の化身」と謳いあげ、高い評価を与えるのである。

ところで、この機智人物なるものは一筋縄ではいかない存在である。評者たちが一様に機智人物とその故事の中に「複雑な性格」「性格上の不一致」「矛盾した形象」が含まれていることを指摘するのは至極当然なことである。この点をいかに解くかが次の問題である。

機智人物の聡明さとは裏腹に、彼らにはしばしば愚かしい言動が見られる。祁連休はそれを次のように解釈する。

「この愚かさは、一見故事主人公のあの聡明機智の性格と抵触する。実はそうではなく、両者は矛盾しないばかりか、それらは人物の性格を形作るにあたって、ちょうど相乗の芸術的効果を生む。主人公の愚かさを示す時も、これらの作品の芸術的構想は当然ほかと完全に同じではない。……『猫哪去啦』『放蟹喝水』の類の作品は、主に愚かさを通して主人公の淳朴、ばか正直の性格を示し、一つの側面から主人公の労働する者の本質を描いているといえる。『買油』の類の作品は主人公の愚かさを描くが、実際は主人公の『大智は愚の若し』の風貌を念入りに際立たせ、この愚かさを借りて、主人公の誠心誠意階級兄弟を援助する、世話好きの心根をなかなか生き生きと、面白く表に見せ、労働する者の伝統的美徳を謳いあげる。これだけの例からも、われわれは次の点を看取するのに難くない。主人公の愚かさの描写は、民間の語り手が人物の性格を浮き彫りにし、血の通った機智人物の形象を作る面で独自の工夫を凝らしていることをはっきりと示している。」⁽¹¹⁾

段宝林はこう説明する。

「これらの故事では、阿凡提自身が諷刺される人物となっている。前述の性格と矛盾するのだろうか。その実、矛盾しない。ここで阿

凡提の思想方法上現われた幾つかの弱点は、政治立場上の誤りではなく、阿凡提の形象を損ねず、かえって彼をして穏やかでうちとけやすくさせ、親しみを感じさせる。彼は愚行をしても、心はやはり良いのである。彼は時に大智愚の若く、時にあまりにも聡明すぎる。両者ともに意味深長な「大智若愚」というパラドックスに拠つているところが面白い。

機智人物故事にはなお「弱点」「欠点」が存在する。祁連休はいう。

「ある種の話の内容は浅薄で、趣味が悪い。例えば、主人公が官吏、僧侶、地主に狗の吠えまねをさせ、糞便を食べさせるとか、寺院に行つて糞尿を放つて金持ちや悪徳商人を懲らしめ、殴り罵るとか、大便を毛生え葉の百霊仙葉と偽つて、地主の頭にのせるとか。ある種の話は一部に卑猥な筋がまじる。例えば、主人公が猥褻な手段で債務を帳消しにし、はては地主を破産させたり、寺院に混乱を起こさせたり。この二種の話は搾取階級に反対し、宗教迷信に不満な人々の気持ちを漏らしてもおり、この点はもちろん社会的意義がないわけではない。しかし、前者の話は明らかに敵の要害を突いてはおらず、むしろ単に本人の利害に何ら関りのない事柄を敵をからかい、一時の気晴しから相手の生理的欠陥を嘲笑し、調和し得ぬ階級闘争を茶番劇のような遊びに変えてしまい、勢い作品の思想性を大いに弱め、作品の社会的意義を削いでしまった。後者の故事の問題はさらに際立つている。その猥褻な筋は主人公の芸術的形象を大いに損ない、流伝の過程で副作用を生み、悪しき社会的影響を生むのは必定である。」

ここに至つて、祁連休は機智人物の性格が矛盾し分裂していると明言せざるを得ない。機智人物故事はいよいよ複雑な様相を呈し、主人公は悪党と見まごうほどである。祁連休はついでいう。

「われわれがこの類の故事の各関係資料を全部一覧すれば、主人

公のほしいままの悪事を描いた一部の作品を発見することはむしろかしくない。例えば、『冒牌叔叔』で、阿古登巴は他人の叔父を詐称して、若夫婦からバター、羊の腿、馬を持ち逃げする。『上樓和下樓』で、阿凡提は面白半分に哀れな乞食を騙して二階に上らせ、またこつびどく乞食を追ひ下ろす。『反江山和粑粑』で、反江山はごろつきのような手段を弄して、白昼堂々と農婦の餅を奪つて逃げ、次には蜂蜜売りの老婆を騙して人の蜂蜜をまきあげる。これらの作品から、貧苦の民衆に対する主役の態度が下劣で、容認しがたいことをはっきりと見てとることが出来る。では、高官、貴人、地主、有力者に対する彼らの態度はどうか。『瞎子拜年』の中で、阿一旦は木土司に媚びへつらう道化である。彼は木土司の歓心を買ひ、搾取階級のくだらぬ欲望を満足させ、卓分の酒席の賞金を得んと、臆面もなく一人の貧しい盲人をもてあそび、衆人の面前で恥をかかせ、池にはまらせる。これらの諸作品は完全に機智人物故事の中にまじりこんだ滓である。」

さらに祁連休は手厳しく決めつける。

「これらの悪い作品中の主人公は、機智勇敢の労働者ではなく、社会の渣滓であり、ある者は民を害するベテン師、ごろつき、ならずものであり、ある者は搾取階級の奴僕、手先、一味である。彼らの名前は例の機智人物と同じでも、実際には両者は二つの相対立する階級に別々に属しているのである。」

「同じタイプの故事の中に二つの異なる階級傾向を代表する作品が現われる」この現象をいったいどのように解釈したらよいか。彼は次のように説明する。

「各少数民族の機智人物故事は階級社会の産物であり、長期間転転と流伝する過程で不可避的に各階級、各階層の思想感情、鑑賞趣味に感染し、必然的に各種の感染の痕跡を残すものである。……こ

れ（機智人物故事の伝播禁止——筆者）と同時に、搾取階級はまた常に彼らの反動的階級的意図と腐敗墮落した趣味に基づいて、この種の話事を偽造し、極力主人公を彼らの必要にかなった人物に変えたのである。」

祁連休は最後に「労働人民の創作、加工した民主的精華」と「搾取階級の利益を体現した糟粕」を、マルクス主義の階級観点に立つてはつきり分析しなければならぬとせしめくる。

祁連休の以上の見解はいずれの論者にも共通したもので、機智人物故事の別の否定的側面、いわば「玉に疵」とも見なされる「弱点」「欠点」を、「旧階級社会の局限性」の反映したもので、「歴史的、社会的条件によって決定された」ものであり、支配階級の「捏造」「改竄」によって「歪曲」されたとも述べ、「精華を汲み取り、糟粕を取り除かねばならぬ」と一様に説く。

「不健康」で「淫穢」な、「庸俗」で「低級趣味」の、「消極、落後の思想意識」を反映した「社会的意義」のない「悪い作品」について、かなりの量が存在するのではないかと窺わせるが、筆者は一部の反動階級の偽造歪曲説はとらない。これら「悪い作品」は一般に国内で公式に活字化されることはなく、外国のわれわれは実際に目にすることができない。整理、選択、出版の過程で一定の意図をいしは操作が介在するという中国の出版事情を考慮にいれておく必要がある。機智人物故事を読むにつけ、筆者には片手落ちの感はやはり免れられない。歓迎されざる、これらの話こそが、所謂機智人物の性格を理解するうえで、示唆に富んだ欠くべからざる部分と筆者は考えるからである。

機智人物のトリックスター性

中国の論者たちの見方について、敢えていえば、説話と現実との関係を固定してしまうという意味であまりに現実主義的であり、単純化、類型化の傾向は否めない。民間故事研究、神話研究の分野では、未だ象徴論を受けいれる余地がないように見受けられる。数多くの機智人物故事を読むと、敢然と智慧を武器に支配者をやつつける正義漢、好漢というイメージが確かに大きく浮かびあがってくる。しかしながら、一方で一部の故事や解説を通して、おぼろげながらトリックスター像が見えてくる。これは恐らく筆者一人ではあるまい。機智人物は民族によって異なる個性や特徴を備えて、一律に論じることが慎まねばならぬが、総体としての機智人物像の中にトリックスター性がかいま見られるのである。所謂機智人物とは一種のトリックスター、トリックスターの生き残りではあるまいか。限られた材料をもとに、トリックスターの痕跡、残像を探ってみようと思う。

トリックスター Trickster とはペテン師、狡猾者、いたづら者の意味で、近年文化人類学や神話学などにおいて、「神話的いたづら者」「いたづら神」あるいは「文化英雄」として重要な概念が付与されている。トリックスターとはいかなる形象か。¹⁹⁾

北米インディアン神話では、多くウサギ、クモ、ワタリガラス、コヨーテなど、アフリカの神話では、クモ、ウサギ、カメなどがトリックスターを演ずるが、実際は単に動物の名前がつけられている象徴的役柄、神話的形象と考えるべきものである。トリックスターは道徳や社会秩序から全く自由で、詐術やいたづらを駆使してあらゆる価値を顛倒し、秩序を擾乱することを主要な役割りとして与えられている原初的存在である。彼の本質は埒を越えること、限界というものに敵対することである。彼は善にして悪、創造者にして破壊者、聖者にして冒瀆者、賢者にして愚者、神にして人、幼児にして老人、煽動者にして調停者、否定者にして肯定者、不真面目であり生真面目、親切であり

意地悪、他人を欺きながら自分をも欺く等々の、矛盾した性格を同時に帯びる、あるいは性格が相互に反転する二重性、所謂両義性をその特性とする。従って、その行動には首尾一貫性がなく、あたかも正と負の宇宙論的構造的磁場を縦横に行き来し、正と負の乱れを己れのエネルギー源としているかのようである。神聖なものと非神聖なものとはつきりした区別がまだ存在しなかつたアルカイックな時期の象徴なのである。ユングは「未分化な人間の意識の忠実な模写」と呼ぶ。レヴィストロースらの構造人類学者によれば、神話的思考の中で、相対立する二元的世界を綜合する仲介者、媒介者の役目を果たすものと考えられている。トリックスターの盗みの才能は持ち前のものである。彼は動植物、穀物、食糧、火、水、道具や女性などを隠匿独占している者、それは多くの場合、魔性の者、至高神、あるいは仇敵であるが、彼らからもつばら得意の策略を弄して（時に性的誘惑を含む）、盗み取って来て人々にもたらし頒け与える。このように神と人間、自然と文化、混沌と秩序の中間にあつて仲介的機能を果たして、文化に貴重な貢献をし、人間に恵みを施す。「文化英雄」とも呼ばれる所以はここにある。ギリシャ神話におけるプロメテウス、ヘルメス、北欧神話のロキ、日本神話のヤマトタケル、スサノオなどは一種のトリックスターと考えられる。トリックスターの創出は、「限界、制約を越えて飛翔する精神の技術」であり、人間普遍の精神上の営為の所産といえ、この神話的想像力のパターンは後々にまで投影する。アルカイックな段階から脱け出し、文明化するあち意識の水準、文化の水準が高まるにつれて（言い様によつては「精神水準の低下」、または娛樂性、笑いの優位につれて、トリックスターの残忍、野蛮、愚鈍、無分別、放埒、変幻自在さは弱まり、彼は使い古されて疲れ、落ちこみはするが、なおその類型の中に残存する。十七世紀西欧のピカレスク小説、演劇的モデルの道化、ピエロ、狂言における太郎冠者、さらにはライ

バルのブルートをいつもなぶり者にするポバイなどの形象になお生き続けている。神話から民話のレベルに至つても、それは見出し出すことができる。ケレーニイはナスレッティン・ホジャをトリックスターとして「嘲笑されているタイプの狡猾な愚か者、もしくは愚かな狡猾漢」と呼び、「この人物においては、どこで彼の狡猾さが終つて愚かさがはじまるのかも、この二つの特質のうちどちらが根源的であるのかも、もう全く見分けがつかなくなつてゐる。狡猾さと愚かさは本質的に関連している。」と述べている。

さて、最後にわが機智人物たちを祖上にのぼせることにしよう。ここで前文で触れた彼らの「愚行」「反人民性」ないしは「反道徳性」については、もはやあらためて解く必要があるまい。

機智人物の智慧はまさしく超人的である。彼は常人の持ち合わせぬ超能力、神性を有しており、人智を越えた鬼神の世界と感応接触し往還することができるのである。

巴拉根倉は比較的トリックスター性の強いキャラクターと思われる。彼が閻魔大王を殴り殺す話は荒唐無稽である。閻魔大王が罪人として巴拉根倉を捕縛せんと鬼卒を派遣するが、未来を予知する能力を持つ巴拉根倉は、事前にワナを仕掛け、来る鬼卒を次々に騙して痛い目に合わせ退散させる。最後に大王じきじきに引き立てに来るが、巴拉根倉は自分の瘦せ牛に細工をして、千里馬ならぬ万里牛だと偽り、大王の服と千里駒をまんまと交換し、鬼卒たちに命じて大王を打ち殺させてしまう。手を変え品を変え展開する奇想天外のトリックに話の眼目があることはいうまでもない。岩江片、光加桑なども同型の話で活躍する。

阿勒的爾・庫沙は旅の途中で魔鬼と出会う。同行することになり、代り番こに肩車をして行こうと取り決める。年長を先に乗せることにし、庫沙は大ボラを吹いて先に魔鬼の肩に乗り、一曲終つたら交代す

るといつて、終りのない歌を歌い続ける。魔鬼に一番こわいものは何かと問われて、庫沙は好物を答え、翌日鬼が用意した物をたらふく飲み食う。そしてまた鬼の肩車に乗って、果てしない歌を口ずさみ、景色を愛でながら快適な長旅を続ける。鬼を手玉にとるこの話は、『捜神記』巻十六「宋定伯、鬼を売る」と同タイプである。

岩江片の「種地」も鬼たちをペテンにかける話。岩江片は鬼たちと組んで作物を植える。前もつて作物のどの部分を食べるかを約束する。一年目、鬼は茎を取り分とすると決め、彼らは芋を植える。二年目、懲りた鬼は根を取るといい、粟を植える。三年目、今度こそ鬼は穂先を望み、トウモロコシを植える。作物の部位の取り分けて相手に損をさせるこのモチーフは広く知られ、中国の伝統笑話にも見られるし、甲金、艾玉、卜伯、阿勒などの故事にもあるが、一杯食わされるのは地主が多い。

トリックスターには境界線が存在せず、人界と他界との間を自由に往き来することが可能だし、空間においても、天に昇る、水中に潜る、地下に降る、遠方に行く、上昇、下降、水平いかなる方向の運動も可能である。

巴拉根倉の「説話」と題する話は、所謂トッポ話の笑話で、スケールの大きい、奇想天外な話である。この想像力は驚嘆すべきものがある。仕事の手を休める農民に話をせがまれた巴拉根倉は、去年の夏の出来事から話しはじめた。――女房から柴を刈って来いと命ぜられ、斧を腰にさげ、馬に騎ってトポトポ出かけた。やがて馬が立ち止まったので見ると、斧が落ちて馬の後ろ足を切断してしまった。彼は樹の枝を切って、馬の尻に接いでやる。また馬は歩きはじめたが、やがてまた立ち止まる。見ると、樹の枝は生長して、まっすぐ天上にまで届く大木になっている。彼は八十一日間その樹を登り、やっと天上に着く。天上を物見遊山して、腹がすいたので帰ろうとすると、樹が見え

ない。馬が後ろ足をひきずって帰ってしまったのである。しかたなく仏様の住む仏殿に行き、食物を乞う。しかし数人の瘦せ細った仏様は風をつぶしながら、「近ごろお布施が少なくて、わしらも食べる物がない」という。下界へ降りる方法を思案中、見れば、ちょうど天上から氷の柱が下に垂れている。柱にしがみついて滑り降りるが、柱は空中で途切れ、地上まで達していない。しがみついたまま途方にくれていると、折しも地上では脱穀の時期、空中に穂や干し草が舞いあがってくるので、それをつかんで少しづつ縄をない、氷柱にしばらくつけて降りる。大地まであと三日という時に、風が吹いて縄が切れ、彼はまっさかさまに落ち、頭だけ地面から出して地中に潜る。そばの紅花の小さな樹が風や陽をさえぎってくれ、彼は虫を追ってやりながら一冬が過ぎる。春になってある日、狼が彼を食べようとする。彼は渾身の力をこめて両足を踏ん張って地中からとび出し、狼を投げとばして殺す。こうして巴拉根倉は狼を背負って家に帰る。「たった今帰って来て、大飯をかきこんでこへ駆けつけたところだ。これがわしの一年の出来事」というと一同大笑い。ホラ話ではあるが、その内容は巴拉根倉の面目躍如たるものがあり、トリックスター神話を髣髴とさせる。

甲金、甫貫、公天らは、なきものにせんとする領主によって太陽と月に追放されたりする。領主は甲金をしばって焼き殺そうと太陽に送りこむ。太陽に着くと、甲金が「涼しいぞ」と叫ぶので、領主は人をやって今度は月に甲金を流す。「月はとても熱い」という甲金の声に領主も胸をなでおろし、以来甲金は月に住むようになったという。神霊、他界との交流、非日常的な空想世界を描いたこの種の記事を、中国では「幻想性」の故事と呼んでいる。

敵対する地主、資産家と機智人物とが岳父と女婿という関係にあるものが意想外に多い。ト合、巴拉根倉、光加桑、老登、岩江片、趙成などがそれである。松谷克忍も主人の黒驢の「干兒子」義理の息子で

ある。甲金も最終的には断わる形になっているが、騙して自分の鼻をつまめば娘を妻合わせると約束する財主をうまく欺き、約束の履行を迫る。巴拉根倉は富豪の娘と相愛となり、百発百中の弓術という富豪の課した結婚の難題を、例によって詭計を用いて解き娘を手に入れる。また阿古登巴は、貧しい友人と敵手たる土官の娘との間をとりもち、仕掛け人の本領を発揮して、友人を貴官の御曹司とふれこみ、トリックを使って縁組を成就させる。トリックスターが二元にまたがり、二元を統合し、対立を解消する媒介的存在であるとするならば、対立面と姻戚関係を持つというこの点にトリックスター性を見い出そうとすることは、あながち的はずれとはいえないと思うのだが、どうであろう。恐らく中国の論者にとって、この観点は「階級調和論」として到底容認できないにちがいない。

機智人物には若干倒錯症があつて、糞尿に対して異常な趣味を持っている。彼らはしばしばトリックの小道具に人間や家畜の糞尿を使用する。汚穢を食う、食わせる、汚物にまみれるといった凶は、トリックスター説話によく見られるもので、トリックスター説話独得のスコトロロジー（糞便学）なのである。これはトリックスターの一種の幼児性と見ることもできるし、価値の顛倒と見ることもできよう。

トリックスターにはなお見逃せぬ重要な特徴がある。それは好色性である。彼の冒険はセックス抜きには考えられず、いたずらの中には性的ないたずらも当然含まれる。性的活力は彼の奔放な行動の一つの源である。ひるがえって、機智人物故事にも猥褻な内容の話もあるということだが、遺憾ながら具体的にそれを目にすることはかなわない。エロス抜きの機智人物に筆者は物足りなさを感じるのである。

機智人物の中に、退化したか、進化したかとはかくとして、トリックスター性を析出しようとする試みは、自身の力量不足からもとより充分成功したとはいいがたいが、筆者は、機智人物はやはり本質的

にはトリックスターであろうと考える。機智人物像の中に、政治社会的支配者、宗教上の支配者に対する反抗性を見るのはいい、しかし、それは一面であつて、別の側面を疎略に見てはならず、充分検討を加えたうえで、全面的に多角的に研究しなければならぬと考える。

注

- (1) 張紫晨『民間文学基本知識』（上海文艺出版社、一九七九）五八、五九頁。
- (2) 段宝林『中国民間文学概要』（北京大学出版社、一九八一）八四頁。
- (3) 八人担ぎの轎に乗った王爺（殿様）が巴拉根倉に、おれを騙してこの轎から降ろしてみろという（仇役はしばしば機智人物に挑戦的である）。巴拉根倉は、轎から降ろすのはできないが、乗らせることはできると答える。「では、やってみろ」と王爺は轎から降りて一杯食わされる。このような手で馬上や階上の者を降ろさせるモチーフは非常に広く分布し、壮族の公頗、佬巧、景頗族の仇片、白族の艾玉、徐文長の話などにもあるし、明代の笑話集、江盈科撰『雪濤諧史』にも類話が見える。朝鮮にも、利口な少年が屋内の塾師や父親を「外にいれぼ中に入らせる方法はある」と騙し外へ出させる同巧の笑話があり、十六世紀朝鮮の名将李舜臣の逸話としても語られている。明代の笑話書、浮白齋主人撰『雅誹』『誘出戸』もこれと同型。
- (4) 段宝林前掲書八五頁。
- (5) 段宝林前掲書九四頁。
- (6) 段宝林『民間笑話美学的な新探索——阿凡提研究之一』、『民間文艺集刊』第二集（上海文艺出版社、一九八二）所収。
- (7) 天鷹『中国民間故事初探』（上海文艺出版社、一九八二）五、労働階級人物故事

(8) 天鷹前掲書一四七頁。

(9) 中国社会科学学院文学研究所各民族民間文学組主編、祁連休編『少数民族機智人物故事選』(上海文芸出版社、一九七八)序言三頁。ちなみに、祁氏は同研究所民間文学研究室研究員。

(10) 前掲書五頁。

(11) 「猫哪去啦」、阿凡提が三斤の肉を買って来て、女房に餃子を作らせるが、女房が全部食べてしまう。阿凡提が問いつめると、女房は猫に盗み食いされたと答える。阿凡提は猫をつかまえて重さを量るとちようど三斤。そこで女房に「これがもし猫なら、肉は?これがもし肉なら、猫はどこへ行った?」

「放蟹喝水」、杜族の佬巧は料理しようとして市場で大きなカニを買う。帰り道、泡を吹くカニを見て、のどが渴いて苦しんでいるのだろうかと思わず、河に放してやる。岸边で待ち続けた佬巧、とうとうしびれをきらして、「この野郎。人が親切に水飲みに放してやったのに、恩知らずめ!」

(12) 「買油」、納斯爾丁は大の恐妻家、女房の前では頭があがらない。女房は亭主を「世界第一の大バカ」という。女房が語るには、久しぶりに漫遊から帰ってきた亭主をどやしつけてから油碗と錢を持たせて油を買いにやらせた。油屋で碗に油をひくもらったが、少し余って入りきらない。すると納斯爾丁はその碗をひっくりかえして、糸底に入らせる。家に帰り、女房が「これっぽちかい」ときくと、納斯爾丁「いや、こつちにもあるよ」といって油碗をまたひっくりかえす。

(13) 祁連休編前掲書序言一一、一二頁。

(14) 段宝林前掲書八八、八九頁。

(15) 祁連休編前掲書序言二二、二三頁。

(16) 同前二四、二五頁。祁連休の注によれば、「冒牌」叔叔は藏族文学史調査組が一九六〇年チベットで採録したもので、記録原稿は中央民

族学院語文系に現存する。「上樓和下樓」は新疆人民出版社一九六三年刊、『納斯爾丁・阿凡提的故事』に、「瞎子拜年」は雲南人民出版社一九五九年刊、『納西族文学史』(初稿)に見えるという。なお、「瞎子拜年」は譚達先『中国民間文学概論』(商務印書館香港分館、一九八〇)四四一頁に引用され読むことができる。

(17) 同前二五頁。

(18) 同前二五、二六頁。

(19) 以下のトリックスター論についての整理は、主として次の二点の文献に拠った。特に山口昌男のすぐれた論述に負うところが大きい。

ポール・ラディン、カール・ケレーニイ、カール・グスタフ・ユング共著、皆河宗一等訳『トリックスター』(晶文社、一九七四) この訳書はアメリカの人類学者ラディンが自身採集したアメリカ・インディアンの、ウイネバゴ族のトリックスター物語群及びウサギ物語群のテキストとその分析、ハンバリーの神話学者ケレーニイと精神分析の心理学者ユングのそれぞれのトリックスター論、山口昌男の解説論文「今日のトリックスター論」から成る。

(20) 「トリックスター」二四〇、二四二頁。
山口昌男『アフリカの神話的世界』(岩波新書、一九七二)

Notes on *Jishi renwu gushi* (Tales of quick-witted persons)
— Especially on their Character of Trickster — : Takeshi
SUZUKI